

◎ 美術館情報

最新の情報は、各施設の公式ホームページなどでご確認ください。

1. 美濃焼ミュージアム【岐阜・多治見】(https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki_museum/archives/7227)

9月12日((土)~12月27日(日)

特別展「多治見市指定 無形文化財「織部」保持者認定記念 鈴木徹展」

本展示会は、令和6年度に鈴木徹が多治見市指定無形文化財「織部」の保持者に認定されたことを記念し、鈴木これまでの緑釉の作品と功績を紹介する展示会です。鈴木は、祖父に後の人間国宝・加藤土師萌から「釉薬の研究では右に出るものはいない」と評されるほどの窯業技師であった鈴木道雄、そして父に日本で初めて焼かれた白いやきもの「志野」をガス窯で焼き重要無形文化財「志野」保持者となった陶芸家・鈴木藏の長男として1964年に多治見市で生まれました。鈴木は幼少の頃から父・藏と同じく陶芸家を志すと考えるも、大学時代には一度親元を離れ、京都で歴史を学びます。学芸員を目指すも就職先が無く、焼き物好きの教授に勧められ京都府陶工職業訓練校（現・京都府陶工高等技術専門学校）で陶芸を学ぶこととなります。そこで初めて自分で作った釉薬が掛かった湯呑みが窯から出てきた瞬間、「DNAが覚醒した」強い感覚を覚え、以来本格的に陶芸に向き合うようになります。そしてこの訓練校時代に京都国立近代美術館で見た、昭和を代表する陶芸家・岡部嶺男（1919～1990）の総織部大鉢に触発され、織部の範疇を超えた新しい焼き物を作りたいと思い立ち、銅緑釉の研究を始めます。以来、日本伝統工芸展を舞台にこれまでは無い様々な作品を発表してきました。鈴木はこれまで、緑釉の濃淡が生まれる櫛目に始まり、土の力強さを感じる泥刷毛目、端正な器形に2色の緑釉が美しく混じり流れるシリーズ、2色の緑釉と飴釉の3色が重なり合う三彩と経て、近年では、陽刻とヒビを纏った破殻（ワレカラ）を新らたに始め、常に自身の作風という殻を破る試みを見せています。この精神が鈴木の出発点であり、革新たらしめているといえるのではないのでしょうか。鈴木徹による緑釉を中心とした破格の現代的表現を是非ご覧ください。

全期片月別 多治見市指定無形文化財「織部」保持者認定記念 鈴木徹展

鈴木徹
展

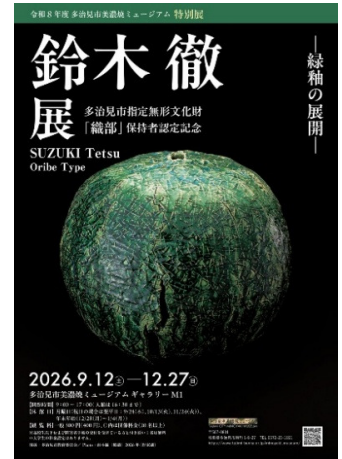
多治見市指定無形文化財
「織部」保持者認定記念

SUZUKI Tetsu
Oribe Type

2026.9.12⑤—12.27⑥

多治見市立陶芸ミュージアムギャラリー M1

開催期間：2026年9月12日（金）～12月27日（土）
開館時間：午前10時～午後5時（入館は閉館30分前まで）
休館日：9月13日（土）、9月14日（日）、9月20日（日）
観覧料：大人 800円（中学生以下 400円）※団体料金あり
主催：多治見市立陶芸ミュージアム、多治見市教育委員会
協賛：多治見市、多治見市立陶芸ミュージアム、多治見市立総合体育センター、多治見市立図書館、多治見市立生涯学習センター、多治見市立市民会館、多治見市立スポーツセンター、多治見市立児童館、多治見市立高齢者福祉センター、多治見市立障害者福祉センター、多治見市立子育て支援センター、多治見市立生涯学習センター、多治見市立市民会館、多治見市立スポーツセンター、多治見市立児童館、多治見市立高齢者福祉センター、多治見市立障害者福祉センター、多治見市立子育て支援センター



◇9月19日(土)~12月20日(日)

企画展: TN NETWORK-Ceramix Communication-@美濃焼ミュージアム

多治見工業高校専攻科・名古屋芸術大学美術領域工芸コース 交流展

東海地区のやきものとガラス専門の学校である多治見工業高等学校専攻科、陶磁科学芸術科と名古屋芸術大学美術領域工芸コースはこれからの工芸文化を担う人材を育成する教育機関として活動を行っています。両教育機関は作品や講評会を通じ、学生や教員同士の交流をはかるとともに活動を地域の方々に広く知っていただくべく8年前より交流展を続けてきました。この度、窯業地である岐阜県多治見市の美濃焼ミュージアムにて新たな展開を試みます。

『TN NETWORK』とは、多治見工業高校専攻科 = 「T」、名古屋芸術大学美術領域工芸コース = 「N」として新たなネットワーク構築を表し、工芸文化を創造する次世代のつながりのきっかけとなることを期待しています。



◇9月25日(金)～12月13日(日)

企画展示 現代陶×茶室 可児孝之展

本展覧会は茶室を一つの展示室と見立て、ガラスケースを介さず直接鑑賞することで、作品を身近に感じてもらう企画展示です。今回は土岐市在住の可児孝之の作品を紹介します。可児は上絵を中心に器から立体表現まで幅広く制作を続けてきました。美濃焼は高い上絵の技術を持った産地として発展してきましたが、全国でも他の産地と比べ生産量がずば抜けて大量であったため、自動化や機械化が進みました。その過程で手仕事による高度な上絵技術を持つ職人の多くが姿を消し、技術の継承も思うように進んでいない現状があります。そのような中で可児は独学で上絵の技術を習得してきました。そして絵具の色にこだわりながら独自で絵具を作り、上絵の表現を展開してきた数少ない作家といえます。茶室の中で繰り広げられる上絵の表現をぜひご覧ください。



2. 愛知県陶磁美術館【岐阜・多治見】(https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki_museum/archives/7227)

10月10日(土)～12月20日(日)

特別展・企画展・テーマ展 夢見る建築—中国古代の明器に宿る建築の断片
「やきものが語る、2つの「夢」の世界へようこそ！」

本展は、古代中国の「建築明器」を中心に、やきもので作られた建築部材、やきものに描かれた建築、建築装飾をイメージさせる現代陶芸など、さまざまな建築表現約120件を紹介する企画展です。

「建築明器って何？」 古代中国で死後の世界でも豊かな生活を送れるようお墓に納められた、家や設備機器などの模型を「建築明器」と呼びます。豪華な楼閣からトイレ付き豚小屋、カマドや井戸など当時の生活感や建築技術を知ることができます。「2つの夢」「建築明器」にみられる古代の人々が死後の世界や来世へ託した「祈りの夢」。そして、やきものに描かれた非現実的な建築や、建築がイメージされる現代陶芸などの「空想の夢」。2つの異なる「夢」をキーワードに、時代も目的も違う作品たちを見比べながら、各作品が持つ「建築」の魅力と「装飾」に込められた秘密を明らかにします。

